

筑紫（九州）の万葉集と風景画シリーズ（第五十二回）

けんしらぎし

# 「遣新羅使と万葉集くその7」

つくしのむろつみ

く使人の歌からわかった「筑紫館」く

・瀬戸内海は本州と四国・九州とに囲まれた内海で古来、畿内と九州を結ぶ海上交通の要路であった。瀬戸内海は夏の季節風は四国山地に、冬の季節風は中国山地によって各々遮おほられているため年間を通じて天候が安定している。また、古代は、予測される激しい潮流、強い風が吹くときには近くの港で停泊するなどで対応していたことが万葉集にも載っているが、このような瀬戸内海航海であっても、古代においては、さほど安全な航海ではなかったようである。実際、天平八（七三六）年六月一日頃（現在七月十三日頃）、難波津（現・大阪港）を出航した遣新羅使たちも、九州上陸に際して佐波島さばの沖（現・山口県防府市沖、周防灘）で逆風に遭い漂流し、豊前国ぶぜんのかくに・分間わくまの浦（現・大分県中津市中津港付近）に命からがら漂着した。本シリーズ前回（第十一回）で記したが、使人たちは、この分間の浦で漂流した時の苦しかったことを思い出し、歌を遺している。

## ◎【筑紫館】について

・遣新羅使らの船は分間の浦から北上し、豊前ぶぜん（現・大分県北部、福岡県東部）・筑前ちくぜん（現・福岡県中央部）両国の海岸線を左手に見ながら航行し、ようやく六月下旬（現在の八月上旬）那なの大洋へ入港している。

・那の大洋（那の津ともいった。）は福岡県北西部にある玄界灘に面した博多湾内にあった港の一つといわれる。

・古代の博多湾の海岸線は今よりずっと陸地に入り込み、切れ込みの大きい海岸線をなしていたことが古地図等で推定される。万葉集巻十五に遣新羅使一行が滞在したとされる「筑紫館」は博多湾に面する場所に設けられていたと考えられていた。

・「筑紫館」は、文献上（日本書紀）には持統二（688）年に初めて現れており、平安時代になって「鴻臚館こうろかん」という名に変わり九世紀前半まで中国の唐や朝鮮の新羅などからの使節を接待、宿泊させる迎賓館であり、また、我が国からの遣唐使や遣新羅使が旅支度をする対外公館であった。

・「筑紫館」の特定した位置は長い間わからなかったが、大正期から昭和期にかけて活躍した中山平次郎九州帝国大学医学部教授が、万葉集に詠まれている天平八年（736）年に「遣新羅使の一行が筑紫館に滞在中に遥かに故郷を偲んで詠った歌」の内容を根拠とし、さらに古地図などを参考にし、古代、博多湾に突き出た丘陵地であった博多湾沿岸の荒津（現・福岡市中央区）付近にあった福岡城跡地にあったと特定した。今、この場所は海の埋め立てにより海岸線から約一キロ離れた地にあるが都市化により博多湾を見渡すことが出来ない。

・中山教授が筑紫館の位置を特定した際の万葉集は次の歌と伝えられる。

つくし たち もつづくに  
【筑紫の館に至りて遥かに本郷を臨みて、いたみ 悽愴みて作る歌】

しか あま ひとひ  
1) 志賀の海人の一日も落ち

から  
ず 焼く塩の辛き恋をも

あれ

# 我はするかも

作者未詳

卷十五—3652

(解説) 志賀の海人が一日も欠かさず焼く塩のように辛い、故郷を想うつらい恋を私はすることだ。

「志賀」は志賀島(福岡市東区)のことで、博多湾の湾口に位置し、今は海の中道りくけいどうによって陸繋島となっている。志賀島は海人の里で古代においては、塩づくりの島として知れ渡っていたようである。

## 2) 志賀の浦に 漁する海人 家人の

いざり

あま

いへびと

### 待ち恋ふらむに 明し釣る魚

あか

うき

作者未詳

卷十五—3653

(解説) 家の者が帰りを待ち恋うているであろうに、志賀の海辺で漁をする海人が夜どおし釣っている魚よ。

## 3) かしふ江に 鶴鳴き渡る 志賀の浦 に 沖つ白波 立ちし来らしも

え

たづ

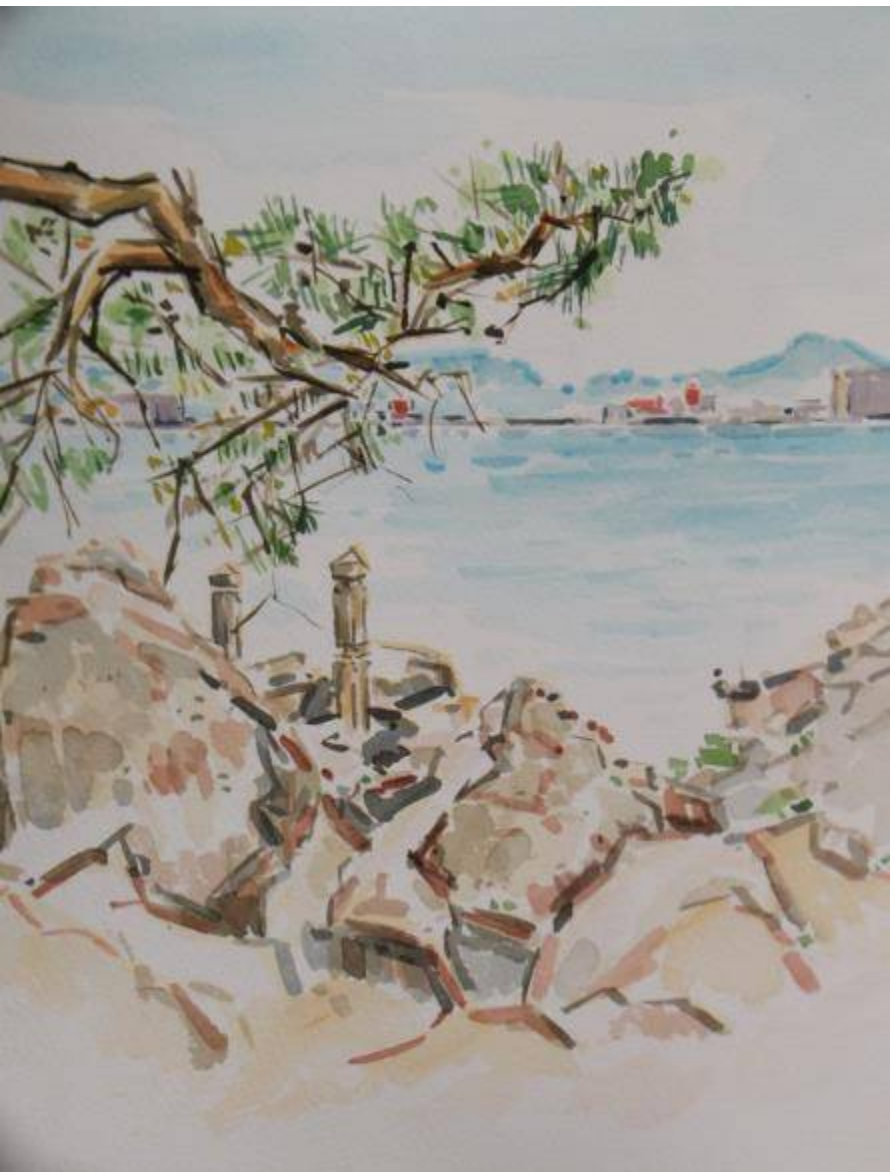
作者未詳

卷十五—3654

(解説) かしふの入江に鶴が鳴きながら飛んで行く。志賀の浦に沖の白波が立って来ているらしい。

(写生地) 「かしふ江」は福岡市東区香椎にある入江。この入江にある名島海岸から

「志賀の海辺」と遠くに「海の中道」「志賀の山々」を描く。(杏花)



4) 今よりは 秋づきぬらし あしひきの  
山松かげに ひぐらし鳴きぬ

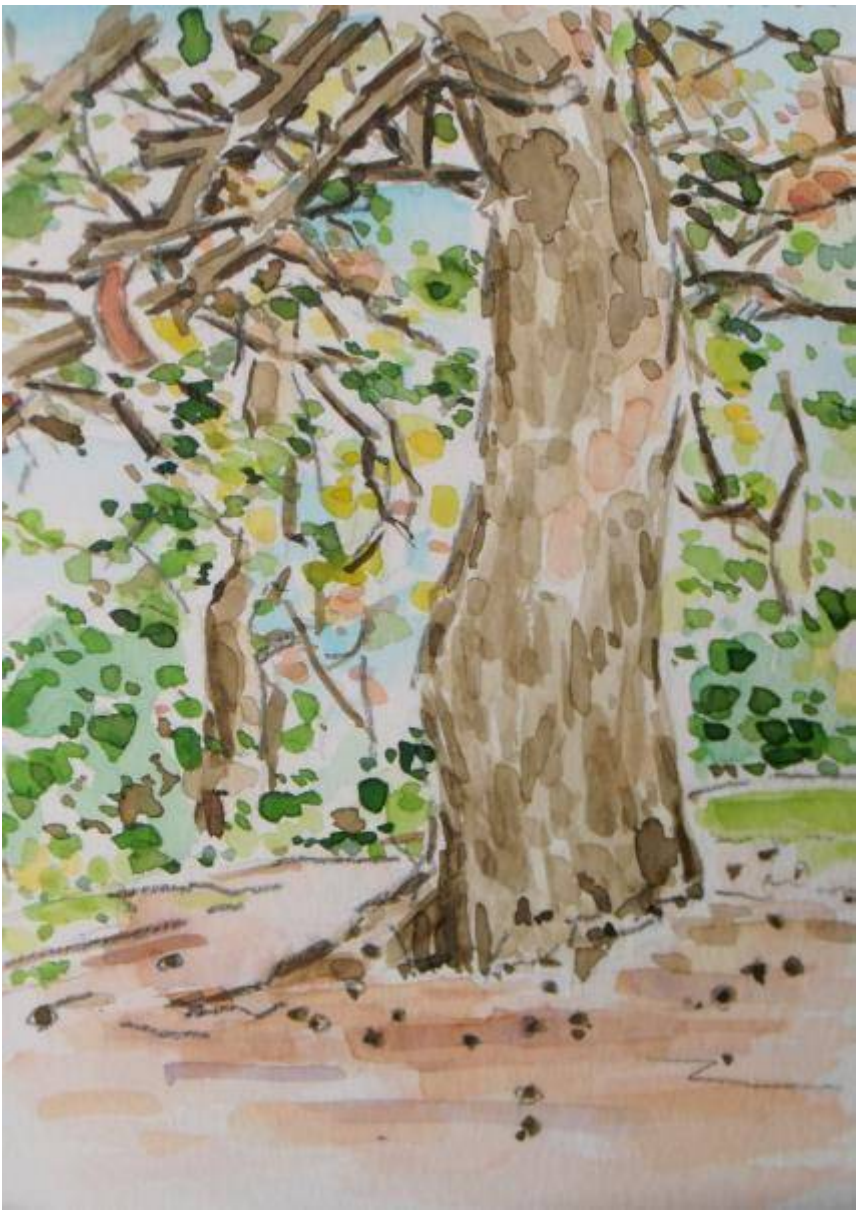
作者未詳 卷十五—3655

(解説) 今や、もうすっかり秋になってしまったらしい。山の松かげでヒグラシがしきりに鳴いている。

・ヒグラシはセミの一種で夏から秋にかけ、夜明けや日暮れに高く美しい声で「かなかな」と鳴く。漂流するなどして、旅が遅れているので、鳴いているヒグラシの鳴き声に、さらに旅先の不安が募ったのであろうか。

(写生地) 「福岡県の地名」辞典には、そばに筑紫館が置かれていたと記述される「古

代の荒津山（現・福岡市西公園）「山頂付近の老松を描く。北側の山の麓には博多湾が広がる。（杏花）



【海辺にして月を望みて作る歌】

かむ

あらつ

5) 神さぶる 荒津の崎に 寄する波

ま

間意くや 妹に恋ひ渡りなむ

卷十五—3660

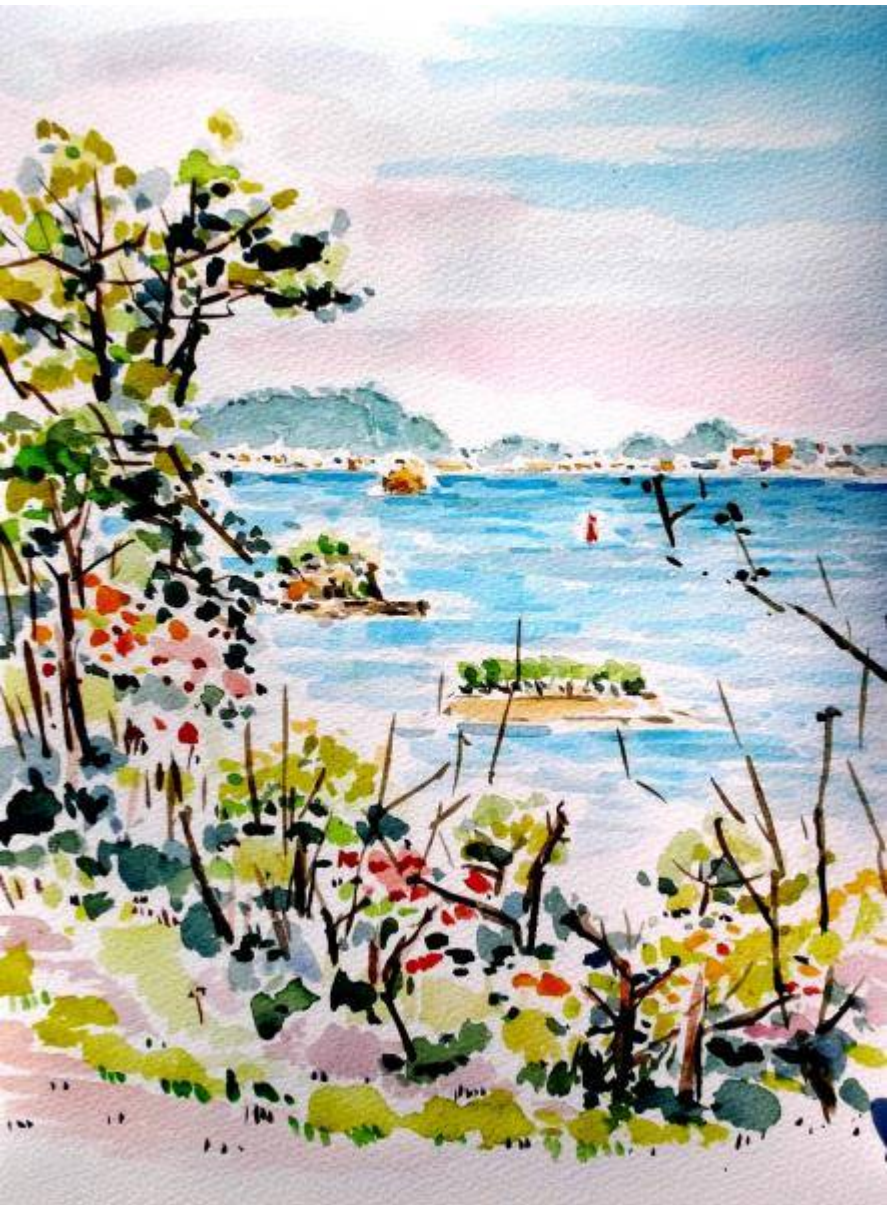
作者 土師稲足

はにしのいなたり

（解説）神々しい荒津の崎に絶える間もなく、寄せては砕ける波のように、これからくだの長い旅の間、絶え間もなく都に残して来た妻を、いつも恋しく思いつづけることであろうよ。

(写生地) 荒津は、福岡市のほぼ中央に位置し筑紫館址(福岡城内址)から約1・5キロ離れた「西公園」一帯を示し、その岬は古くは博多湾に突きでた丘陵地で「荒津山」と呼ばれた。との説がある。万葉歌に詠われている「荒津の崎」に想定される「西公園」の先端部から山麓の先に広がる博多湾と遠方に志賀島などの風景を描く。

(杏花)



【筑紫の館の位置】について

・中山九州帝国大学教授はこれらの歌は新羅へ派遣される使人が、筑紫館を出発するにあたり、はるかに故郷を偲んで詠った歌と考え、その歌の内容から第一に「志賀島」が見える所、第二は「神さぶる」の歌に荒津の潮の音が聞こえている。第三は、「今よりは」で近くの松山に蝉の声が聞こえる。この三点から考えて福岡城築城(慶長12年完成)以前の福岡の地以外にないと論考され「筑紫館は博多湾を隔てて志賀島を望むべく、又、西公園を見るべき海岸の山地にあったことになる。この地点は、福岡

城の位置よりほかにない。」と述べられている。

・昭和62年12月に中山教授が筑紫館のあった位置と特定された福岡城址の一角にあったプロ野球西鉄球団の本拠地・平和台球場の改修工事行う際に実施した福岡市

(教育委員会)の発掘調査を契機に、その後の継続的調査の実施で奈良時代以前(筑紫館)の塀と門、奈良時代の塀と掘立柱などと、多くの中国製陶磁器などの遺構、遺

物が出土したことなどから、この地が「筑紫館(後の鴻臚館)址」であることが確認されている。現在、同遺跡は国指定の文化財(史跡)となっている。

(参考文献) 日本古典文学大系「万葉集」、博多に強くなるうシリーズ「鴻臚館」、上野誠氏「万葉びとの筑紫」  
日本歴史大系「福岡県の地名」など

## 「位置図」

